

## 北欧教会建立伝説の成立背景

水 野 知 昭

### I

1986年の日本口承文藝學會研究例会において、「大工と鬼六」の成立をめぐる、高橋直勝氏の推論と櫻井美紀氏による立証が相次いで公表され、これが北欧教会建立伝説の翻案であるという説が打ち出され<sup>1)</sup>、センセーションを巻き起こしたことは周知の事実である。私は両氏によってほぼ実証されたかに見える学説に反論するつもりはない。しかし聖オーラヴと聖ラウレンティウスの教会建立伝説に両氏の議論が帰着したまま、その後、管見の及ぶ限りでは研究上の進展が見られないようである。確言できることは、両氏の議論の帰着点であった北欧教会建立伝説そのものが、実は口承文芸研究の新たな出発点になるということである。すなわちその伝説が成立した背景として、北欧のアースガルズ壘壁造成神話とギリシアのトロイア壘壁造成神話（両者とも、厳密には後述するように「築城」ではない）や、その他の類話が広大な裾野として拡がっている。なお、「グリム昔話集」に記載された「ルンベルシュティルツヒェン」(KHM55)も類話となるが、これについては鈴木満氏によって言及済みであるから本稿の考察から除外する<sup>2)</sup>。

わが国の比較神話学の先達、松村武雄によって北欧教会建立伝説とアースガルズ「築城」神話の類似がすでに指摘されている。しかしそこに提示された註によれば、ウーランド (L. Uhland) とソーブ (B. Thorpe) の著作に依拠したとあるが、次の一文を見れば、氏はこれらの原著の誤読もしくは古アイスランド語の原典についての誤解をされたようである。

「この民間説話を読むものは何人も、直ちに Völsungasaga のうちに怪奇な光を放っているかの一神話—— Frost-giant 族の一人が、アサ神族のために宮殿を造った物語を想ひ浮かべるであろう。」<sup>3)</sup>

ここで「ヴォルスンガ・サガ」(松村の註では「13章」とある)は、「スノッリのエッダ」所収の「ギェルヴィの幻惑」42章に訂正すべきであり、Frost-giant すなわち「霜巨人」は「山巨人」(bergrisi) と記すべきであった。また「宮殿を造った物語」というのも神話を誤認されたと言わざるを得ない。この神話は宮殿の築造ではなく、後にも見るように、壘壁の構築を語っているからである。なお、松村は当伝説と神話の類似に触れているが、異教神話のキリスト教化を言及するにとどまっている。しかも北欧教会建立伝説（以下ではK伝説と略記）とアースガルズ壘壁造成神話（以下A神話と略記）の類似については、おそらく最も早くは1762年にシェーニング (Gerhard Schoening) によって指摘されており<sup>4)</sup>、今世紀の初頭にフォン・シドウ (C. W. von Sydow) によって本格的な考察が試みられている<sup>5)</sup>。

## II

まずA神話の粗筋を簡単に記してみる。

- (a) ミズガルズ（人間世界）を定め、死界ヴァルホルを築き、神々が定住を始めた頃、ある鍛冶屋が訪れる。
- (b) かれは山巨人や霜巨人の攻撃に対して守りの万全な「塁壁」（原語 borg には「丘、堡壘、防壁」の意味がある）を一年半のうちに造ることを申し出る。
- (c) ただしその工事の報酬として女神フレイヤを自分の妻として、さらに太陽と月を貰い受けたと言う。
- (d) 神々は協議の結果、その建設工との取引に応じることにした。ただし、一冬の間に工事を完成することを条件とし、夏の最初の日が来ても未完であった場合には、約束はご破算になるという付帯条件を課した。
- (e) さらにこの工事においては、いかなる人間の援助も得てはならないとされた。が、鍛冶屋はスヴァシルファリという名の馬を使役することは認めてほしいと言ったので、ロキの助言もあってこの件は了承された。
- (f) こうしてかれは塁壁の建設に着手したが、夜には例の馬を駆使して岩を運搬した。
- (g) 神々はとてつもない大石を運ぶその馬の力に仰天した。しかし鍛冶屋との取り決めは、強力な立ち会い人と多くの誓約をもって成されていた（そのため一方的に破棄することも不可能だった）。折しもソール神はトロール征討のため東方遠征に出かけていて不在だった。
- (h) 冬も過ぎようとする頃には、いかにも頑強な塁壁が完成間近であって、夏が来るまで三日を残す頃になると鍛冶屋は門の建設に着手した。
- (i) 慌てた神々は会議を開き、かかる緊急事態を招いた張本人はロキだということで意見の一致をみた。そこで鍛冶屋との約束を反古にする何らかの手段を講じなければ、恐ろしい死を覚悟しろ、といってロキを脅迫した。怖くなったロキは然るべき対策を講じることを約束した。
- (j) その日の夕方、鍛冶屋が馬スヴァシルファリを引き出したとき、森の中から一頭の牝馬が駆け出して来ていなないた。牡馬は暴れだし、手綱を引きちぎると牝馬を追って逃げた。鍛冶屋の追跡もむなしく、夜の間にじゅう馬どもは走り回り、工事は停滞した。
- (k) 翌日も同じことが起こった。
- (l) 鍛冶屋は仕事が完成しそうにもないことをみてとると、「巨人の怒り」（ヨトゥン・モーズ）を露にした。
- (m) 神々は相手が山巨人であることを知ると、誓いを無視してソールを呼び寄せた。
- (n) ソールは現場に急行するや、ミョルニル槌を振り上げると、「工事の報酬」（スミーザル・コイブ）を支払った。すなわちその報酬は太陽でも月でもなく、最初の一撃で巨人の頭蓋骨を粉々に打ち砕き、相手をニヴルヘルへ放逐した。
- (o) さてロキ（例の牝馬に変身）はスヴァシルファリと交わり、やがて子馬を生んだ。そ

れは灰色で八本足で「神界と人間界で最高の馬」と称えられ、オージンの愛馬スレイプニルとなった<sup>9)</sup>。

上のようなA神話といわゆるK伝説（フォン・シドウは代表的なトロールの名前を採って「フィン伝説」と命名）の間には、確かに基本的な一致が認められる。フォン・シドウはそれらの原型が異教の神話にあると考えたが、『スノッリのエッダ』には、その原型的な神話の歪曲したものが記録されていると主張した。たとえばロキの牝馬への変身と牡馬スヴァシルファリとの交合は本来の神話には属さず、そこではむしろソールが主人公であったと解釈したのである<sup>7)</sup>。フォン・シドウの推定によれば、次のような語りが原型的だとされる。

- [1] ソール（または神々）が巨人にある建物を建造してもらう。
- [2] その仕事を三夜（または一晚）のうちに完成することが条件。
- [3] そしてフレイヤ（またはソールの娘）および太陽と月が巨人への報酬となるはずであった。
- [4] 仕事は急ピッチで進む。そこでソールが会話によって工事の遅延をはかる。
- [5] ついには朝日が昇って巨人（およびかれの馬も）石に変えられる<sup>8)</sup>。

『詩のエッダ』所収の「アルヴィースの歌」において、ソールが自分の娘に求婚した侏儒を明け方まで質問攻めにして、ついには退散させる話が記されている。フォン・シドウが想定したモチーフ[4]はこの詩歌の語りをふまえてのものであろう。しかしながらドゥ・フリース(J. de Vries)は、上の「原型的な神話」は「単なる仮説にすぎず、幾つかの弱点がある」と次のように厳しく批判している。

- (イ) 会話による工事妨害は「神の計略としてはあまりにもお粗末」である。
- (ロ) 超自然的存在者（悪魔や精霊その他）が宮殿、道路、堤防、水車小屋などを造る民話においては、完成間近にして鶏が鳴く（または鳴かせる）モチーフやあるいは祈禱して太陽の出現を早めるなど、仕事の妨害には種々の手段が認められる。したがって「会話」を原型的にみなす必然性はない。
- (ハ) フォン・シドウが想定した原型では馬が一切登場していないが、異教神話においては馬が顕著な役割を果たしている。
- (ニ) 太陽と月を報酬とするモチーフは聖人オーラヴの伝説にそぐわない。神であればいざ知らず、「いかに聖人といえども、天体を支配する能力があるとは思えない」からである。
- (ホ) 工事請負人に対して人間の「魂」を報酬として約束する民話がしばしば認められるが、これは本来、建物や橋を建設する際に「人身犠牲」が求められたと説明しうる<sup>9)</sup>。

このうち(ハ)は新しい見解として評価できるが、検討の余地はある。フォン・シドウに向けられたその他の批判はおおむね正当であるかにみえる。特に反論(イ)は重要である。もしフォン・シドウに従って神話が民話に先行するとみなした場合、フォン・シドウの想定した原型

神話に馬が登場しないのはやはり合点がゆかない。ただしドゥ・フリースによる反論(おおよび(=)が提示されるよりも以前に、フォン・シドウはK伝説(フィン/スカッレ伝説)がアイルランドの聖モギュ(またはアイダン)伝説に由来するという説を公表している。

聖モギュ(またはアイダン)は教会を建てようと思い、それをわずか一晚のうちに完成しようとした。灰色馬の助けを借り、山から建築の資材を運ばせた。日の出前には仕事はほとんど終りかけていた。しかし、悪魔が赤毛の女に魔法をかけて、(窓から)その現場を見るように仕向けた。女はその建物を見て、大声を張り上げた。

「あれ、まあー、モギュ聖人さま、たまげた! それを全部、お前さまが一晚のうちに建ててになったの?」

聖モギュはその声にすっかり動転してしまい、両手を下げ、仕事は完全に中断した。そして灰色馬は積荷を落とした。その積荷は今でも残っており、三軒分の家と同じくらい大きい。教会はついに完成することなく、崩落してしまった。そして聖人の彫像はもはや残っていない<sup>10)</sup>。

確かにほとんど教会の建設が完成するというときに、赤毛の女が声をかけて仕事が頓挫をきたしたことを語る聖モギュ伝説は、K伝説と基本構造において類似している。フォン・シドウはあわせてアイルランドの英雄フィン・マックール(Fionn mac Cumhail)の伝説の中に、類話があることを指摘した。それによれば、巨人がフィンのところへやって来て、強力な馬の援助によって困難な仕事を遂行するのだが、法外な報酬を要求する。フィンは苦しい立場に追い込まれるが、最後には巨人を出し抜き、報酬の支払いを免れたことが語られている<sup>11)</sup>。

そして「太陽と月を与えよう」というケルト人の言葉が「太陽と月にかけて固く誓う」ことを意味する決まり文句になることに着目したフォン・シドウは、それを聞いた北欧人がその誓約の意味を誤解したことから、K伝説における「太陽と月の報酬」のモチーフが生じたと主張したのである<sup>12)</sup>。そしてフォン・シドウの弟子マイ・フォッセニウス(Mai Fossenius)は、師のアイルランド起源説を補強し、ノルウェー系のヴァイキングによるアイルランド侵寇以降に北欧へ逆移入されてK伝説が成立したと説いた。また「太陽と月の報酬」のモチーフについても、誤解によって発生したという師の説に賛同している<sup>13)</sup>。しかしインゲル・ボーベルイ(Inger M. Boberg)は「太陽と月」について、多くの伝承に見られる一種の平行現象として説明できると異議を唱えており、この問題の決着はまだついていないと言えるだろう<sup>14)</sup>。

上の二種のアイルランド伝説と北欧の建設工伝説は個々のモチーフにおいて類似性はなるほど否定しがたいが、ハーバード大学のJ. ハリス(Joseph Harris)は、フィン・マックールの伝説群の全体を見渡せば、アイルランドを起点として北欧に伝播したというフォン・シドウの仮定は説得力に欠けると述べている。また聖モギュ伝説の場合には、聖人が率先して始めた仕事を、最後の仕上がり寸前に悪魔が妨害するのに対して、北欧のK伝説の場合は、トロールに仕事をやらせて最後の土壇場で妨害するのは聖人の方であり、完全に立場が入れ替わっている、と主張した<sup>15)</sup>。

しかしながらハリスの反論にもかかわらず、聖モギュ伝説とフィン・マックール伝説には共通して「超自然的な馬の援助」というモチーフが認められることは注目に値する。また聖モギュ伝説においては「女性による工事の妨害」というモチーフがある。便宜的に前者をモチーフ(x)、後者をモチーフ(y)と呼ぶとすると、北欧のK伝説においてトロールの女房の子守り歌は結果的に工事の中止を招いたのであるから、一種のモチーフ(y)と解しうるが、モチーフ(x)は欠落している。またA神話の場合にはモチーフ(x)は明瞭であり、ロキが「牝馬」に変身して工事を妨害したという話はモチーフ(y)の変形と言えるだろう。

ただし私は、アイルランドから北欧へとといった一方向的な伝播を想定するつもりはない。古来、大掛かりな工事において馬の力を借りることは、現実によく行なわれたであろうから、それが民話や神話のレベルに転用され、馬に限らずさまざまな「超自然的な援助者」として登場してもいっこうに不思議ではない。また特定の期間を定めて依頼された工事を集中的に進めている最中に、ある意味ではきわめて日常的な存在者としても言うべき「女性」の介入が、男たちの意識を現実の世界に連れ戻すことも多々あったであろう。モチーフの類似性から、ただちに一方向への伝播を想定することにはつながらない。しかし、上のような北欧とアイルランドにおける類似は、それぞれ別個にある共通の生活基盤、または共通の信仰体系より発したと断言することも、今のところ出来ない。さらなる比較考察を進めようにも、すでに多くの先学が試みたことであり、おのずと限界がある。何らかの別の尺度を導入する必要があるが、北欧に視野を転ずる前にもう少し「馬」のモチーフにこだわってみる。

聖モギュ伝説の異話では「大聖堂」の建設の仕事を援助する「匿名の者たち」が登場し、「灰色馬」が運搬したものが「岩」であることが明示されている。そして同じような事情で建設が妨害されたとき、「聖人とすべての援助者は仕事を停止し、馬は最後の積荷を落とした」と述べられている。そして「大聖堂は完成しなかったが、馬が運びそこなった数々の岩はいまでも近くの丘の斜面に見られる」という後日譚が添えられている<sup>16)</sup>。

ブリタ・エガート (Brita Egardt) が指摘したように、いわゆるA神話の後日譚によれば、ロキが変身した牝馬と鍛冶屋の馬が交わって生まれたスレイプニルは「灰色」であり、聖モギュ伝説の馬と共通している。そこでエガートは、灰色であることが超自然的な馬に必須の特性であったのだらうと推察した<sup>17)</sup>。エガートよりも20余年前に、高名な民話学者のカール・クローン (Kaarle Krohn) が数々の民話における「超自然的な馬」のモチーフについて調べ、典型的な類話としては次のような粗筋になっていることを指摘している。

「ある男が灰色馬を捕らえ、課せられた労働—ときには建設—において類いまれな業を発揮する。役目を終えると、その不思議な馬は解き放たれ、海の中に飛び込んでゆき、その正体が水魔 (スウェーデン語 vatten-häst 「海の馬」; bäcka-häst 「河の馬」) であったことが明らかになる」<sup>18)</sup>。

北欧のA神話における馬スヴァシルファリも、テキストには直接言及されていないが、上の推察からすれば灰色馬であった可能性が高い。だとすれば、さらに仮説を上乗せした言い方となろうが、聖モギュ伝説の異話と共通して「灰色馬による岩の運搬」というモチーフがA神話のひとつの根幹を成しているとみなしうる。上記の粗筋(o)の項目で述べたように、

「灰色馬」のスレイブニルは八本足で、主神オージンの愛馬となり、「神界と人間界で最高の馬」として称賛されている。いわばスレイブニルは神界と人間界を往来するオージンを乗せて走る馬である。オージンは選りすぐれた勇者を死の宮殿ヴァルホルムへ拉致し、時には死者を蘇らせてその口を通して予言を問ひ尋ねる神だが、そのときにこの世とあの世を往来するために灰色馬にまたがったという（「バルドルの夢」2節）。その息子ヘルモーズが冥界に下降するときにも、オージンの愛馬を借り受けている（「ギェルヴィの幻惑」49章）<sup>19)</sup>。「八本足の馬」というのは一見奇妙だが、実際にそのような伝承が存在したことは、8世紀頃に描かれたシェングヴィデの画像石（スウェーデンのゴットランド島）が物語っている。そして幾つかのサガの記述によって、「灰色馬に乗る」ことが不幸や死を招くという俗信があったことがわかる<sup>20)</sup>。

このような北欧の諸伝承に基づけば、A神話に想定した「灰色馬」スヴァシルファリは、この世とあの世の境域を象徴しており、しばしば死界と同一視される巨人の国（ヨトゥンヘイム）から神界を訪れた鍛冶屋の「異人特性」を暗示していることになる。この馬の名称は後述するように、「旅すること（動き回ること）によって不幸を招くもの」を意味しており、馬が担った「潜在的な不幸」（スヴァシル）がはたして神々と巨人のいずれの側に降りかかるか、という緊張をはらんだ語りになっている。

これに対して、K伝説には灰色馬どころか、およそ馬のモチーフが無い。トロールの傍らで働く、匿名の助力者（ときには姿の見えないトロールたち）が登場する場合もあるが、語りを見る限りにおいては「超自然的な力を発揮する援助者」というには程遠い存在である。むしろ請負人のトロール自身がほとんど単独で建設を完了する直前までこぎつけている。しかし、最期の段になってその仕事を中断させるばかりか、トロールの死を招くのは、留守をあずかる女房が謳った子守り歌が原因となっている。したがって、「ある女性的なものによる工事の中止」というモチーフ(y)は、A神話とは質を異にするが、K伝説のなかにも明らかに存在している。

### III

さて、聖モギユの伝説と北欧のK伝説の類似性については、フォン・シドウよりも早く、1866年にパトリック・ケネディ（Patrick Kennedy）が指摘している。手元にその原著がないので不確かだが、ケネディは、聖モギユ伝説における妨害者である女性が「赤毛」なのは「日光」の暗喩であり、「相手をだまして朝日が昇ったかのよう思わせる」という民話によくあるモチーフだろうと推察したようである<sup>21)</sup>。しかし、K伝説においては、仕事請負人が「太陽と月」を報酬として要求する話になっているものの、建設を完了すべき刻限が特に定められておらず、また「日の出」のモチーフと緊密には結び付いていない。強いて言えば、トロールの女房の歌詞に「明日になれば父ちゃんのスカッレが帰ってくるよ」という一節があることがそれを暗示していると受け取れないこともない。

この意味では、むしろA神話の方が「一冬の間に工事を完了し、夏の最初の日が来たときには完全に終了していること」という条件が課せられたという点において、夏の始まりを告知する「日の出」のモチーフが隠されていると言えよう。いわばA神話は、一年を「冬と夏

に二分する」北欧古来の農事暦に基づいている。一年は冬から、一日は夜から始まるとみなされたこともよく知られている。そうすると、A神話に語られた「冬から夏」への季節の移行行きは、「夜から日へ」と読み替えることも可能だろうか。言いかえれば、A神話の鍛冶屋（後になって正体が「山巨人」であることが判明）が請け負った「一冬」という施工期間、聖モギュがみずから設定した「一夜」という建設完了のデッド・ラインと伝説上等価であり、互いに変換可能とみてよいのではないかと思われてくる。

A神話の記述に従えば、鍛冶屋は当初、「1年半」のうちに完成してみせようと申し出たのに対して、神々は協議をした結果、「一冬」に短縮することを相手に要求して例の契約を交わしている。注目すべきことに、ここで「1年半」を表わすために、「半年 (misseri) の三つ分」という言い方がなされている。このような神話伝承の担い手を想定すれば、彼らはここで、冬と夏、そしてまた冬といった、めぐり来る三回の「半年」(misseri)を鋭く意識したのであろう。

なお、アイスランドでは1年を misseri「半年」に分け、その合計を数えて年数を数える慣習がまだ残存しており、平年を全体で52週(364日)、うるう年を53週(371日)として換算する「週年」という一見したところ奇妙な暦が今日でもなお用いられている。「夏至(あるいは冬至)までは、過ぎた週を加算してゆくが、その年の夏(または冬)が終ると、こんどは逆に減算してゆく」という<sup>22)</sup>。このように週を数え上げるやり方は、かつては北欧の全域で一般的だった。ちなみにアイスランドの12世紀の法律文書によると、冬の「半年」(misseri)の開始は10月9日から15日の間の「木曜日」、夏の「半年」(misseri)の開始は4月9日から15日の間の「木曜日」(ノルウェーでは6月9—15日の木曜)と定めていた<sup>23)</sup>。

「木曜日」はローマの暦では「ユビテルの日」(Jovis dies)と命名されたが、ゲルマンでは自分たちの雷神ソールをこのローマの神に対応させ、木曜日を「ソールの日」(古英語 *bur(e)sdag*; 古高ドイツ語 *Donares tag*; 古アイスランド語 *porsdagr* その他)と呼び表わした。よく知られているように、その週日の名は現代にも受け継がれている(英語 *Thursday*; ドイツ語 *Donnerstag*; スウェーデン語 *Torsdag* その他)<sup>24)</sup>。

北欧の建設工神話においては当初、ソールは「トロール退治のために東方へ遠征に出かけていて」不在である。したがってその「木曜日」の神が、鍛冶屋が山巨人としての正体をあらわしたときに、神々の召喚を受けて登場したというのは、まさしく「夏の最初の日の訪れ」を象徴的に物語っているかに見える。

ただし注意すべきは、スカンジナビア本土でも既述したように10月9日—15日の「木曜日」が冬の開始日であったが、一日は夜から始まると考えられていたので、その祝祭は「冬の夜」と呼ばれ、その名の通り夜に行なわれたということだ<sup>25)</sup>。したがってA神話において、「一冬」の労働を課せられた鍛冶屋すなわち山巨人は、その数日前に神々の前に姿を現わし、年暦の上ではまさしく木曜日の「冬の夜」から壘壁造成の仕事を開始したことになる。同様に、理念的な見方をすれば、ソールは「夏の最初の日」となる「木曜日の夜」に出現すべきことになろう。ところが、スノッリが記した神話テキストの文脈によれば、鍛冶屋がその正体を現わしたとき、「神々は誓約 (eiðr) を破り、ソールを呼び寄せた」とある。したがって、ソールは「夏の misseri」が始まる直前、すなわち「冬の misseri」の最終日に現われ、山巨人を血祭りにあげたということになる。以下で確認するように、巨人の仕事は「夜」に

集中的に行なわれている。したがって、再び理念的な言い方をすると、巨人は、神々の契約違反によって、「夏の開始日の前日の夜が明ける直前」に殺害されたことになる。

以上の考察を踏まえて、改めてA神話の粗筋を追いながら、幾つかの残された問題点を整理してみよう。

まず、神々は、「三つの半年 (misseri) の内に仕上げてみせよう」と言った鍛冶屋の申し出を、三分の一の「一冬」に短縮した上に、鍛冶屋に対して「"なんびと"の援助もまかりならぬ」という厳しい条件を出した。これに対して、鍛冶屋は「それならスヴァジルファリという名の"自分の馬"の助けを得ることを認めてくれ」と述べ、課せられた条件からの抜け道を巧妙にも探りだしたと言える。鍛冶屋のこのような申し出を認めるように神々に進言したのはロキであった。馬の名を分析すると、svaðillは原義的には「すべて転ぶ場所」を表わし、転じて「不幸な出来事」を意味しており、また-fariは「旅行くもの；動き回るもの；過ぎ行くもの」を意味する<sup>26)</sup>。したがって、この馬が鍛冶屋の援助者としてあわただしく働き、めまぐるしく動き回ればまわるほど、神々にとっては「太陽と月と女神フレイヤ」を鍛冶屋に与えねばならぬという「不幸」へと突き落とされる危機が高まることになる。そればかりか、最終的には鍛冶屋がソールによって撲殺されるという結果を招いているので、馬の持ち主にとっても「不幸にも冥府への旅を強いられる」ことを示唆していると読める。このような意味において、先述したように、「今後、不幸がどちらの側に降りかかるか」緊張をはらんだ神話だと主張したのである。

こうして「冬の第1日」から馬は物凄い力で巨岩を運び、鍛冶屋は馬を駆使して「夜のうちに岩を運んだ」と記されている。鍛冶屋の仕事は通常の労働と異なり、打ち続く冬の夜に行なわれたことが強調されているかに見える。馬は「とてつもなく大きな岩を運搬してくるので、神々は仰天した」とあるが、ここで「岩」と訳した原語はbjargであり、「山」をも意味しうる。こうして鍛冶屋はきわめて迅速に工事を進めてゆき、「夏が始まる三日前」には岩の門を残すだけとなっていた。

神々は急遽、会議を開いた。このままでは誓約に従い、フレイヤを巨人の花嫁として与えねばならず、太陽と月をも巨人に奪われてしまうことになる。そこですべての責任をロキに課して、緊急事態の打開を要請しているのだが、そのときに神々は、鍛冶屋と交わした「契約」(kaup)を破棄するような「計略」(ráð)を打ち出さねば、「惨めな死に方をすることになるぞ」と言ってロキを脅迫している。そこでロキは、「いかなる犠牲を払ってでも、鍛冶屋との契約を反古にする」ことを約束している。

さて、鍛冶屋は例によって「晩」(kveld)になると、超自然的な馬を駆使して「岩」を運搬する仕事をしたが、ロキが変身した牝馬がその牡馬を森へ誘い出すと、二頭の馬は「夜を徹して」(alla nótt)駆けまわり、仕事が停滞したと記されている。すなわちこの文脈においても、鍛冶屋は一冬の間、「暮れ方」より始めた工事を「夜」を徹して行なっていたと読める。J・ハリスはこの事について、神話や民話によくある「非現実的な夜の労働」と言っている<sup>27)</sup>。

こうしてロキ(牝馬)による妨害が繰り返されたことによって、鍛冶屋は約束の刻限までに工事が終わらないと思うと、怒り心頭に発し、ついには山巨人としての正体を露わにした。「巨人の激怒」(jötun-móðr)をまのあたりにした神々は約束を反古にしてソールを呼び寄



せた。先に述べたように、ソールの召喚は「夏の最初の日」の訪れを早めたことを示唆している。太陽と月と女神フレイヤという「報酬」(kaup)の代わりに、ソールは暴力的な仕方ではンマーによる一撃で巨人の脳天をかち割り、「鍛冶屋の仕事に対する報酬」(smíðar-kaup)を支払った、と皮肉な表現がなされている。あとは例の「灰色馬」スレイブニル誕生という後日譚が添えられている。

先に述べたように、神々の契約違反によって誘発されて、「夏の開始日の前日」に巨人殺害という事件が発生している。これは巨人にとっては悲惨事ではあるが、神々の側に立てば、「夏の半年」を祝して、「平和と豊饒」を祈願する「犠牲祭」を執行したと言える（「オーラヴ・トリュグヴァソン王のサガ」67章参照）<sup>28)</sup>。別の言い方をすれば、A神話には、次に考察するK伝説にも共通して、「工事を請け負った異人を殺害する」という根幹を成すテーマが認められる。大規模な土木や建設の工事には、大地に血を流す祝祭としての「犠牲」が不可欠であった古代の信仰を反映していると言わざるをえない。

誤解のなきよう言い添えておくと、ソールは単に暴力の神ではないことは、ノルウェーからアイスランドに植民した人々、特に農民たちによってオージン以上に崇拝されていたことから知れる<sup>29)</sup>。雷神ソールは豊饒を招く特性をあわせ持っていた。「神々と人間たちのなかで最も強い」と称えられたソールは（「ギュルヴィの幻惑」21章）、神々の国アースガルズの守護者であった。10世紀後半の詩人ソルビョルン・ディーサルスカルドも、「ソールは勇武をふるい、イググ（オージンの別名）の従者たちとアースガルズを守護した」と歌い上げている（「詩語法」11章50番）<sup>30)</sup>。

#### IV

さて次にはK伝説に焦点を当ててみよう。A神話の鍛冶屋が「巨人の激怒」によっておのずから正体を露呈したのに対して、K伝説の場合には、聖人がいかに相手の名前を知るかに、主眼が置かれている。フォッセニウスは、いわゆるK伝説に属する北欧各地の異話を紹介しながら、トロール名を網羅的にあげている。それによると典型的なFinnやSkalle (skallig「禿げ頭の」に関連)のほか、Slätt, Släpp, Glätt, Gläpp, Tväster, Ästerなどがある<sup>31)</sup>。またFinnの異名としてFing, Find, Hinn Finnなどがある。このなかでもFinn（またはその変異形）がノルウェー南部、スウェーデン南部、およびデンマークにおいて最も一般的である<sup>32)</sup>。このトロール名が古ノルド語のFinnrに由来することも、フォン・シドゥによってすでに指摘されている。小人の名称（「巫女の予言」16節）に用いられた一方で、スカルド詩では「山のフィン」は「巨人」を指していた<sup>33)</sup>。いずれにせよ「異形の者」を表わす名称であろう。

北欧神話で小人といえば、「イーヴァルディの息子たち」や「ブロックルとシンドリ兄弟」などのように（「詩語法」43章）、鍛冶師の群像が連想される。また伝説上有名な鍛冶師ヴェルンド（英国にも広まった伝承ではウェーランド）の父親がFinnrという名の王であったことも特記しておこう（「ヴェルンドの歌」）。この場合のFinnrは種族名としての「ラップ人」を指すというのは通説であるが、多くのサガの用例に見られるように、ラップ人は古来より北欧人にとって「奇怪な魔術を弄する人々」として忌避された人々であり（たとえばその一

例は「黒髪の手ルヴダンのサガ」8－9章<sup>34)</sup>、セイズ (seið) という呪術に代表されるシャーマニズムの技法をノルウェー人に伝授したのもラップ人だという説があるくらいである<sup>35)</sup>。したがってその民族名をトロールの名前に転用したとも考えられる。

ノルウェーの北部を舞台にした幾つかのサガにおいて、「トロール」や「巨人」(troll, jötnar, risar) と言え、ラップ人をさしていた。またノルウェー人とラップ人の混血を指す「半トロール」(hålf-troll) または「半分・山巨人」(hålf-bergrisi) という呼び名は、侮蔑的な意味を含んでいたであろう<sup>36)</sup>。この意味においてA神話における仕事請負人は匿名だが、「山巨人」(berg-risi) であったことは無視できない。あわせて「鍛冶屋」(smiðr) と呼ばれていたことも、この推論と合致する。

しかしその一方では Finn 人名としてもよく使用されたことを考慮に入れると (Finna, Finnbogi, Finnkell など)<sup>37)</sup>、必ずしも侮蔑的なニュアンスばかりだとは言いきれない。少なくともこの名称が付された初期の段階においてはその反対に、特別な技能を備えた極北の人々に対する尊敬または畏怖の念が込められていたのではあるまいか。ちなみに初期アイスランドの資料では Finnar (複数形) はラップ人とフィン人の両方を指し、数々のサガの文脈においてもしばしば判別が困難であるが、ノルウェー人の交易相手であり、先述したように呪術に熟達した人々として描かれている。1世紀末のタキトゥスの『ゲルマニア』46章に Fenni という部族名が見え、フィン人とラップ人のいずれに解するか、説が分れている<sup>38)</sup>。2世紀のアレクサンドリアの地理学者プトレマイオスも、フィノイ (Phinnoi) という部族をあげているが、「スカンディア (スカンジナビア) の北部」に位置するという記述によれば、ラップ人を指すとみてほぼ間違いない。また6世紀の史家プロコピウスは、ラップ人を Skriþiphinnoi と呼んでいる<sup>39)</sup>。この一見したところ不思議な名称は、9世紀末のアルフレッド大王 (英国のウェセックス王国) が「ノール岬を經由して白海に到達した」北欧の旅行家オッテレから伝え聞いた Skridefinnas という種族名と一致する<sup>40)</sup>。それぞれ -oi と -as は複数語尾であるからその相違は問題にならない。第1要素の skriþi- (または skride-) は、古ノルド語 skriða 「(スキーなどに乗って) 滑る」に関連すると考えれば、スキーや橇を操ってトナカイ業を営むラップ人 (Finnr) を指した名称であると推察できる。

ノルウェー北部のいわゆるラップランドは、古くから「ラップ人の境域」を意味するフィンモルク (Finnmörk) と呼ばれていた。古ノルド語の mörk は「森」の意味だが、mark 「境界 (のしるし)」と関連し、英語の marsh 「沼沢の地」と同系である。したがって「ボーダーランド」がその原義である。手元の辞書には「古代において広大にして深き森林はふたつの国を分け隔てるボーダーランドであった」とある<sup>41)</sup>。ノルウェー南部の人たちにしてみれば、フィンモルクは半島を南北に縦断するキリル山脈を越えた彼方にある「辺境の地」と思われるであろう。たとえば1230年頃に書かれた「エギル・スカッラグリムソンのサガ」(14章) には、次のように記されている。

フィンモルクは広大な国である。大きなフィヨルドがその内奥部まで深く切り込み、北や東のすみずみは言うに及ばず、西の海岸線にまで達している。その南に位置するのがノルウェーだが、フィンモルクは、ちょうどハーロガランドが海沿いに伸び広がるのと同じように、南に向けて幾重にも山を越えたところまで広がっている。ノイムダルの東にヤム

トランド、続いてヘルシングランド、クヴェンランド、そしてフィンランド、最後にカレリアの国がある。しかし彼方に広がりわたるフィンモルクは、いま述べたどの国々よりも山が多く、ある者は谷間、またある者は湖沼の近傍など、高地のいたるところに居住地がある。フィンモルクのいくつかの湖の広さには驚嘆させられるが、その間に広がる森林地帯もこれまた深い。その国を突っ切るようにして、キリルという名の高い山脈が連なっている。(拙訳)<sup>42)</sup>

この記述を信頼すれば、ラップ人の居住地は現在よりもはるかに「南」の「幾重にも山を越えた」ところにまで広がっていたことになる。ノイムダル(トロンヘイムの北に隣接)以下に列挙された国名を見ると、筆者の視点はノルウェーから東のスウェーデン北部に移り、そのままボスニア湾を越えて東のフィンランドへと向けられている。ここではフィンランドとフィンモルクは画然と区別され、フィン人とラップ人は種族を異にするという見方がはっきりと打ち出されている。そして「森林地帯」を指して、mark-lönd という語を当てており、その広大な森がノルウェーの北辺のハーログランドとのまさに「境界標」(ランドマーク)の役割りを果たしていたことを明記している。

建設工伝説の中心地ともくされるトロンヘイムを起点に考えれば、隣のノイムダルからさらにハーログランドを北上した、急峻なる山々の彼方に、ラップの国なるフィンモルクがあると思ひ描かれたであろう。航海術の発達したノルウェー人にとっては陸路よりも海路の方がアプローチは容易であったであろうが、その逆に南下した Finn (ラップ人) が目の前に出現したときには、あたかも「山々や森の彼方から来訪した異人」のように映じたであろう。

ただし、Finn という名の語源は不明である。古ノルド語 finna 「見つける」に関連させて「家畜(トナカイ)を集める、遊牧の民」と解する説が打ち出されてきたが<sup>43)</sup>、この動詞の語義を考えるとやや無理がある。むしろ私としては、フィンという巨人(トロール)名は動詞 finna 「訪れる、見いだす、出会う」から派生した動作主名詞であると考えておきたい。なぜならば後述するように、この建設工は山や森の中からの「突然の来訪者」の意味合いが濃厚であるからである。ラップ人の暮らしを思えば、トナカイの群れを追う遊牧の民であるからこそ、上のサガにも示唆されているように、森や谷間や湖畔などを移住し、その所在がつかめないことが多々あったであろう。ノルウェーの人々の目にはまさしく神出鬼没の民と映ったに違いない。

建設工の名前のうち、Finn に次いで多いのは Skalle であり、異話の全体のおよそ三分の一を占めるという<sup>44)</sup>。スウェーデンでは特に山や島、または森などの名前によく用いられている<sup>45)</sup>。ごく大まかな傾向を言えば、聖人オーラヴの对手はスカッレ、聖人ラウレンティウス(またはラーシェ)の对手はフィンとなっていて、前者は北ノルウェーのトロンヘイム教会、後者は南スウェーデンのルンド教会を中心に伝説が分布している。しかしフォッセニウスによると、ルンド教区でも聖オーラヴの名前はよく知られていて、スウェーデンの中部から南部にかけては、聖人が匿名である例が多く、司教、聖堂参事長、ビショップ、王、または農民といった職分のみが明示され、なかには単に男、または少年の例もあるという<sup>46)</sup>。これに類似してデンマークにおいても、聖ラウレンティウスが仕事委託人である伝承も散見されるが、匿名の場合が断然多いという<sup>47)</sup>。このような分布状況を概観すれば、北欧の建設

工伝説はまずトロンヘイムの大聖堂を中心として成立し、その地を詣でた中世の巡礼者たちによって北欧全土に広められたというフォン・シドウの説は正鵠を得ているように思える<sup>48)</sup>。

聖オーラヴ関連の教会は、スカンジナビア半島だけでもおよそ400を数え、オーラヴ崇拜はデンマークや北ドイツ、およびライン川下流域、あるいはポーランドやロシアにまで広まっていたことが知られている<sup>49)</sup>。いずれにしても、当初は不明であった工事請負人の名前がその妻の子守歌によって露見するという体裁をとっているが、それらの歌が脚韻を踏んでいることに注目したい。また相手の名前を知った聖人が完成間近の教会の下から大声をはりあげると、トロール（または巨人）は転落して石に変じたり、忽然と姿を消したりするのだが、その場合の聖人の掛け声も脚韻を踏むものが認められる<sup>50)</sup>。

“Skalle slått — sätt spiran rätt”

「べちゃんこ頭のスカッレ、尖塔を真っすぐに据えろ」

“Tväster (Äster) — sätt spiran väster”

「トヴェステル（エステル）、尖塔をもそっと西に据えろ」

周知のようにゲルマン古来の詩歌は頭韻をもって特色としている。したがって脚韻を踏む「名当て」のモチーフを基本とするかぎりにおいて、K伝説はA神話よりも後代の所産であるように思われる。

教会建立の仕事に対して約束された「報酬」のモチーフに着目すると、たとえば次のような変異が認められる。

(a) 司祭の両目と「天の城に輝く二つのもの」

(b) 仕事依頼人自身

(c) 太陽と月、または依頼人の心臓の血

(d) 太陽と月、および司祭の心臓の血

[それぞれの異話の採録地：(a) ボフスレン地方のロメレ教会、(b) ハッランド地方のシェーリング、(c) ハッランド地方のアースイエ、(d) ヴェステルイョートランド地方のエクスネヴァッラ]<sup>51)</sup>

このうち報酬(a)の奇妙な表現は天に輝く「太陽と月」を含意しており、同時に司祭の「両目」との連想が働いていると思われる。報酬の中身として(c)「太陽と月、または心臓の血」と(d)「太陽と月、および心臓の血」の変異があることが特に注目される。依頼人の生死に関わるものが仕事の報酬として求められている。後に見るようにトロンヘイムに発した聖オーラヴ伝説そのものにおいても、(c)の「または」型と(d)の「および」型の異話が存在しているからである。

フォン・シドウは1932年の論稿において、教会建立伝説はノルウェーのトロンヘイムの大聖堂においてまず成立し、中世の巡礼者たちによって北欧各地に広まったと主張している<sup>52)</sup>。もしこの説に従うならば、我々としてもトロンヘイムの伝説を検証してゆくことが必要となる。さしあたりここでは、1704年にエーンベルイ (J. Eenberg) がスウェーデンのウップサ

ラに伝わる話として記録した異話（仮にX型とする）と<sup>53)</sup>、1842年にヒュルテン-カヴァリウス（G. O. Hylten-Cavallius）が「イエムトランドの伝説」に収録した異話（Y型とする）に焦点を絞ることとする<sup>54)</sup>。語りの粗筋については既によく知られていると思われるが、X型は次のように要約できる。

聖オーラヴが海と陸を走行できる素晴らしい船に乗ってノルウェーに来て、この国をキリスト教化しようとしていたときのことである。七つの演壇から同時に説教することが出来るほどの壮大な教会を、トロンヘイムに建立しようと計画した。しかし、建設に必要なすべてのものに欠けていたので、教会はほとんど半分も出来上がらなかった。そこで聖王は不満をいだきながら、森の中へ歩いて行った。するとそこで、自分が教会を完成してみせようと申し出る者に出くわした。ただし、工事が完了したならば、太陽と月、または聖人自身をその者に譲り渡すということが条件で、もし完成する前に名前を言い当てたならば、相手が永劫に聖オーラヴの捕虜となるという約束であった。聖人はその申し出を受け入れた。だが、建設工事が進むにつれて、聖オーラヴの不安がつのる一方であった。というのも、そのトロールの名前も出生も知るすべがなかったからである。教会が完成間近となり、残るは尖塔を立てるだけとなった。聖オーラヴは不安の念に駆られながら、最初にトロールと出会った場所を探して山道を登って行った。すると山の中で子供の泣き声と母親がその子をあやす声が聞こえてきた。

「よしよし、坊や、静かにおし、

明日、父ちゃんのスカッレが帰って来るからね。

お日さまとお月さま、

さもなきゃ王様のオーラヴを連れて」。

こうしてトロールの名前を知った王は、道を取って返すと、トロールが尖塔を立てようとして前かがみになっているところを見はからって、「スカッレ、十字架を真っすぐに立てろ」と叫んだ。これを聞いてトロールは、王を押しつぶそうと思って、尖塔から身を投げ出し墜落してきた。王はこれをおかしく、相手の膝頭に斧を投げ下ろした。それからこ奴を捕らえさせると、自分の玉座の下に、生きている限り枷で捕縛しておいた<sup>55)</sup>。

Y型においても、大聖堂の建設請負人が、後でその妻の子守り歌によって名前が露見すること、またその仕事の依頼者が聖オーラヴ王であることでは、X型と共通している。ただし明かされるトロールの名前がフュスリング（Fysling）になっている。J・サールグレンによれば、これはスウェーデン語の方言 fötling、すなわち「靴下をはいた足」または「四足獣の足の下部の毛皮」を意味し、ドイツ語 Däumling「手袋の親指」（転じて「親指小僧」）に対応して付けられた名前だという<sup>56)</sup>。「ちっぽけな奴」といった軽蔑語であろう。

約束された「報酬」がX型では「太陽と月、または聖人自身」であるのに対して、Y型では「太陽と月、および聖人自身」となっている。当然のことながら、これに応じて、Y型の子守り歌の歌詞はこの個所が異なっている。「お日さまとお月さまを持って、それにまたオーラヴ聖人を連れて」と<sup>57)</sup>。そして特に結末における相違に注目される。トロールの名前がスカッレであることを知ったオーラヴ王が、仕事を仕上げるために尖塔を立てようとしてい

る相手に向かって、呼びかける場面である。

〔Y型〕「フesslering（スカッレ親父）、尖塔を真っすぐに立てろ」と聖オーラヴは叫んだ。スカッレは墜落して、その跡に水の斑点模様ができた。同時にそれまで目に見えなかった数え切れない多くの者（トロールか?）たちも墜落してきた。一部の者は不具になり、ぶら下がった場所に大釘で固定された。また別の者たちは大怪我を負い、死んでしまった<sup>58)</sup>。

トロールの最終顛末を語る他の異話としては、「塔から転落して、フリント石に変じた」とする話のほかに、ただ「転落して殺された」と語るもの、また「転落死する直前に、オーラヴに向かって斧を投げつけた」という民間伝承もある。M. ブーヴェルによれば、このうち特に三つめの伝承（スウェーデンのネルケ地方）は、ノルウェーのトロンヘイムの教会に起源を発するという<sup>59)</sup>。

上の伝説が採録されたのは18—19世紀と比較的新しいが、「斧を持つ聖王オーラヴ」や「トロールを玉座の下に捕縛、または足で踏みつけたオーラヴ」を描いた教会彫刻が13世紀初頭から15世紀にかけて、ノルウェーやスウェーデンを中心とする北欧の各地で作られた（写真参照）<sup>60)</sup>。したがって殊にXの話型は、口承の伝統をも考慮に入れると13世紀以前にまで溯ることが想定できる。オーラヴ・ハラルドソンがノルウェーにおけるキリスト教の布教に努めたのは1016～1028年であるが、はたして教会建立の伝説の成立がその当時まで溯り



Fig. 1 テュルダルの聖王オーラヴ像  
（ノルウェー、Hedmark 地方：1230年頃）。



Fig. 2 ヴィーク教会の聖王オーラヴ像  
（ノルウェー、Fosnes：1470年頃）。

うるか否かについては確証がない。しかしスティクラスタジルの戦いにおいて戦死した1030年以降にオーラヴ王を称賛する詩歌が創作され、また没後100余年を経て、聖者としての事績と生前に行った奇跡を語る物語『パッシオ・オーラヴィ』(Passio Olavi)が作られてい



Fig. 3 アルスタホイグの聖オーラヴとトロール像  
(ノルウェー, Helgeland: 1400年頃)。



Fig. 4 シーストランの聖オーラヴとトロール像  
(ノルウェー, Finnmark: 15世紀)。



Fig. 5 船に乗った聖オーラヴと石に変えられるトロールたち  
(スウェーデン, Västmanland, ディングトゥーナ教会: 1450-1520年)。

る<sup>61)</sup>。これらのことを考慮に入れると、オーラヴにまつわる教会建立伝説の成立は、キリスト教によって喧伝されつつその名声が一気に高まった11世紀後半から12世紀初頭であろうと推定しうる。

注目すべきことにXの話型では、聖オーラヴが水陸両用の船に乗って、ノルウェーに到着し、トロンヘイムを訪れ、キリスト教を広めるために大聖堂を建てようとしたという。しかし万策つきて工事を中断し、「森」の中へ迷いこんだときに出会ったのが例のトロールであった。いわば「海の彼方からの来訪者」と<sup>62)</sup>、「山（森）に住む異人」との出会いがこの物語りの根幹を成しているとみるべきである<sup>63)</sup>。

スウェーデン南部のルンド大聖堂に伝わる建設工伝説については、すでに高橋宣勝氏によって紹介されているので、繰り返すまでもないと思うが<sup>64)</sup>、聖人の名前がラウレンティウス、後に明かされるトロールの名前がフィン（Find：Finnの変異形）になっている。1654年にイエンス・L・ヴォルフ（Jens L. Wolf）によって採録された話によれば、工事完了の暁に譲渡すべき報酬が「太陽と月と聖人の目玉」になっている。粗筋は先のふたつの聖オーラヴ伝説によく似ているが、報酬の項目が三つ並列されてあるという点ではY型と共通である。ただし、次に見るように、聖人が町に戻ってトロールに声をかける場面からの最終部と顛末が異なっている。

教会の完成も間近なある日、トロールが例の報酬を要求した。聖ラウレンティウスは答えた。「フィン、お前には教会が仕上がらないと、何にもあげないよ」。

トロールは自分の名前を呼ばれたので、激怒し、教会を倒そうとして柱につかみかかった。それをくい止められたのは神によって力を与えられた聖人であった。そしてトロールとその女房、また子供を石に変えられたのだ。彼らの姿は今でも見る事ができる<sup>65)</sup>。

この伝説では、いささか無残なことにトロールの妻ばかりかその子供までもが石に変えられたことになっている。ルンドの大聖堂へ行くと、石柱の下部にしがみついたトロールとその妻と子供の彫像を実際に見ることが出来る<sup>66)</sup>。先述したX型では「トロールを聖王の玉座の下に、生きている限り捕縛しておいた」と述べられ、Y型では「尖塔から墜落して死んだ」とある。いずれも、伝説の上では教会建立の功労者とも見るべきトロールの哀れな最期について、憐憫の情がほとんど及んでいないように思える。

聖ラウレンティウスは南スウェーデンのルンドにキリスト教が伝わるよりも何百年も前に、ローマで殉死した人物である<sup>67)</sup>。トロールに相対する覇者として、伝説の中にあえて異国の聖人を導入すべき理由はどこにあったのだろう。その明答を得ることは難しいが、キリスト者にとっては布教を進める上で完全に敵対視すべき、「異教」のあるキャラクターがトロール圧服伝説の背後に隠されているように思われてならない。きわめて注目すべきことに、X型の聖オーラヴと共通して聖ラウレンティウスも、「悪しき子ども」を征服し、またそれにまつわる伝統的な、しかしキリスト者にとっては「卑下すべき」異教を抑圧するための「神聖なる来訪者」と見られていた。



ここで日本の類例を出せばいかにも唐突な印象を受けるが、比較考察の視野のなかに、鬼神を自在に使役した役小角<sup>えんのかづね</sup>の伝承が浮上してくる。「続日本紀」(文武天皇三年の条)によれば、「小角能く鬼神を役使し、水を汲み薪を採らしむ。もし命を用ゐずは即ち呪を以て縛る」とある<sup>68)</sup>。また『日本霊異記』(上28縁)には、役優婆塞<sup>えんのおぼそく</sup>(小角)について、「鬼神を驅使ひて自在を得、諸の鬼神をうながして、催して曰はく「大倭国の金峯(金峯山)と葛木峯(金剛山)とに橋を渡して通はむ」といふ」と記されている<sup>69)</sup>。この話が12世紀前半に成立した『今昔物語集』になると、鬼神たちは「多くの大きな石を運び集めて、造り整えて」、橋を架け始めたことと記され<sup>70)</sup>、葛木山から約30キロメートル隔たる金峯山に参詣のための石橋を架けるといふ難事業に鬼神が使役させられたというのである<sup>71)</sup>。

櫻井美紀氏が引用した水田光の説明によると、北欧の教会建立が「大工と鬼六」(または「鬼の橋」)では「架橋」に変えられ、仕事の報酬としての「日月」が「眼球」に変改せられたという<sup>72)</sup>。しかし上記の資料に拠れば、「橋を架ける鬼」のモチーフそのものは日本古来のものであり、日月と眼球の連想は、禊祓したイザナギの左目から天照大神、右目から月読命が出生したという記紀の伝承を踏まえたものではないかと推察できる。

ところで聖オーラヴの足で踏みつけられたトロールの姿は、たとえば増長天によって足で踏みつけられている鬼の姿(東大寺の木彫り像)を想起させる。大和岩雄氏は、「仏の眷属に足で踏みつけられる邪鬼」あるいは鬼神を使役する役小角の伝承も、「仏教的鬼神観」の影響によると説いている<sup>73)</sup>。オニの語源は「形が頭れることを欲しない鬼物」(『倭名抄』)であって、「隠」の字音から転じたとする見方が有力である<sup>74)</sup>。再び大和氏の言い方を借りると、皇祖神・天皇の側から見て、まつろわぬ邪しき「かみ」や「もの」が「鬼神」や「鬼」と表記されるにいたったとされる<sup>75)</sup>。

このような支配と被支配という簡明な図式を北欧のK伝説の成立に当てはめることが出来るかもしれない。すなわち聖オーラヴに代表されるキリスト教的思想による異教の抑圧という歴史がひいては、フィン/スカッレ伝説の拡播をうながしたと推定しうる。言い換えると、槌をふるう戦神ソールによる巨人族征討の神話がまず先行し、それが転用されて、斧をふるう聖オーラヴによる邪鬼(トロール・巨人)圧服の伝説が成立を見たのであろう。そこで改めてA神話とK伝説を比較してみると、次のような類似または特徴が認められる。

- (a) 工事の請負人は当初、正体不明である。
- (b) 仕事の報酬は三種類であるが、「太陽と月」は神話的なモチーフと思われ、Aは求婚難題型(女神フレイヤを花嫁として要求)に属し、Kは人身犠牲(目・心臓の血・聖人自身を要求)より発しているようである。
- (c) そのためK伝説には「太陽と月、または」型と、同「および」型がある。つまり建造者は王に対して、宇宙的な支配権か、さもなくばその身を犠牲にすることによって人間界の支配権を委ねるかという、二者択一を迫っているのがXの「または」型であり、その両方を要求しているのがYの「および」型と解し得る。
- (d) 援助者。Aでは「超自然的な」馬、Kでは目に見えない多くのトロールたち。
- (e) 完成寸前に仕事の妨害が入る。Aでは援助者(馬)に対する性的な誘惑、Kでは請負人の妻の子守歌。いずれも女性的なものが工事の停止を強いる。

- (f) 請負人の正体が暴露される。Aでは激怒によって山巨人としての本性が露見する。Kでは(e)に導かれての名当てが基本を成す。名はその者の実体を表すであろう。
- (g) 誓約の破棄または破綻。Aでは仕事依頼人である神々による一方的な破棄。Kは、名当てによって能力を喪失した請負人が転落または消失、あるいは石に変わることにによる自滅型と位置づけられる。
- (h) 請負人の殺害または捕縛を招く武器。Aでは戦神ソールの槌、Kでは聖王オーラヴの斧。
- (i) 仕事依頼人の支配権の確立。Aでは巨人（鍛冶屋）を死界へ葬り去る。Kではトロールを玉座の下に半永久的に捕縛。

上のようなおよそ9項目の類似性とこれまでの推論によれば、A神話がK伝説に先行するという仮説が成り立つであろう。そしていずれも困難な建設工事に携わる者は、山（森の中）から来訪した異人であるという特徴を有する。

## V

さてA神話の語り出しでは、ソールは東方遠征に出掛けていて不在だった。鍛冶屋の正体が山巨人であることが分かって、神々は急遽ソールを召喚したとされる。危急のとき、その名を呼べば馳せ参ずる神であったソールは、ここでもまさに神界と人間界の守護者としての面目躍如たるものがある。「ニャールのサガ」102章では、異教を信ずる女詩人ステイヌンがサングブランド神父（997—999年にアイスランド布教活動）に向かって、「ソールはキリストに決闘を申し込んだが、キリストはソールと戦おうとはしなかった」という言葉を投げかけている<sup>76)</sup>。キリスト教の布教に際して、根強いソール崇拜が大きな障壁として立ちはだかっていたことを物語る一節であろう。同じ箇所にも、「ソールの力による激しき嵐がそれ（神父サングブランドの船）を破碎した」、とステイヌンが詩歌のかたちで吟じている。また「植民の書」15章には、アイスランドの近海で嵐に襲われたとき、ソール神に犠牲を捧げたという記述が見える<sup>77)</sup>。いわば、嵐と嵐を司る神としてソールが崇拜されていたのは紛れもない事実である。そうすると教会建立伝説における巨人に Vind och Väder（「暴風」の意）や Bläster（「突風」の意）といった名称が用いられているのは、ひとつにはその原姿にソールの本性が潜んでいるからだと説明できる。

タキトゥスの『ゲルマニア』3章に、「まさに戦いに赴こうとするとき、彼らはすべての英雄の第一として彼（Hercules）を称えて歌う」と記されているが、ソール神をローマ式に対応させると Hercules になるというのが通説である<sup>78)</sup>。また3世紀頃のケルン、ボン、マイントの碑文に Hercules の名が見え、ボン、コブレンツおよびモーゼル川周辺などにおいて、Hercules Saxanus の名で「採石夫の守護神」として崇拜されていた、とドゥ・フリースは説いている<sup>79)</sup>。言い換えるとソールは元来、たとえば石造りの墨壁の工事に際し、「城塞の守護神」あるいは「槌をふる神」として崇拜されていたと推定しうる。

またソールの槌の模造品がしばしば出土するが、これらは災厄を払う護符（たとえば婚礼の浄め）として用いられていた。したがって後代、機能的にキリストの十字架と対立関係に

置かれることとなった<sup>80)</sup>。教会建立伝説における巨人・トロールが名前を言い当てられた途端に、石や火打ち石となって砕け落ちるという話から推断を下すと、あの魔物たちは、キリスト教によって敵対視されたソールの零落した姿を部分的に引き継いでいると言える。その一方では、槌を愛用の武器として巨人退治をするソールの性格が斧をふるう聖人オーラヴに受け継がれている。したがってA神話におけるソールの特性は、K伝説の成立の過程で、建設請負人と依頼人の両者の性格に分裂させられていることになる。

城塞の守護神としてのソール本来の性格を考慮に入れると、スノッリが記したアースガルズ神話は、おそらくより古くは「塁壁造成」神話に淵源するであろう<sup>81)</sup>。なぜなら鍛冶屋が造ったborgは、「塁壁で囲まれた場所」または「堡塁」そのものを意味するからである。ここで後者を「原アースガルズ神話」と命名しておくことにする。敵勢の攻撃が予想される段階において、ある限られた期間のうちにその労働を達成するには、馬の助力が不可欠であったであろう。したがって「馬」のモチーフは、原アースガルズ神話のなかに当初から含まれていたと考えられる。

なぜここで原神話を仮定しておくかといえば、トロイアの堡塁造成神話にも基本的に類似したモチーフや構造が認められ、フォンテンローズ (Joseph Fontenrose) の説に従えば、両者はある共通の源から派生したと考えられるからである。そしてこの神話も『イーリアス』21書などの資料によれば<sup>82)</sup>、築城ではなくして堡塁造成を物語っている。幾つかの資料を勘案しながら、その粗筋を記すとおよそ次のようなものとなる。

ポセイドンとアポロンがトロイアの王ラオメドンのために、一年を費やして、撃破され得ない防壁を造ってやる。そのとき神々はラオメドンの傲慢さを試すために、人間の石工に変身していたことを伝える資料もある。さて、防壁が完成したのに王は然るべき報酬を払わぬばかりか、侮辱した上に脅迫して追い出した。そこで復讐のために、ポセイドンは海の怪物を送りこみ、また洪水を生じさせ、アポロンは疫病を送り、トロイアを荒廃させた。そのような災いから免れるには、トロイアの人々は高貴な乙女を海の怪物に犠牲として捧げねばならぬという神託があった。ところが偶々、籤によってラオメドン自身の娘ヘシオネーが生け贄となることになり、彼女は海辺の岩に繋がれた。そこへアルゴ船の仲間とともに遠征の途中であった英雄ヘラクレスが立ち寄る。王は娘を救出してくれたならば、返礼として名馬（神ゼウスより下賜された馬）を与えることを約束した。あるいは王女を花嫁として与えるということが約束の内容であったという異伝もある。ヘラクレスは見事に怪物を討ち果たすが、ラオメドンはまたしても約束をたがえた。ヘラクレスは激怒したが、遠征を続行するためその地を離れる。やがて遠征の当初の目的（黄金の羊毛を入手すること）を成就した英雄は、その帰路、トロイアを攻略し、ラオメドン王を殺害する。そしてヘラクレスは、トロイア攻略の第一の手柄を立てたテラモーンに王女ヘシオネーを与えた。

さてフォンテンローズは、トロイア堡塁造成神話（以下、T神話と略称する）と先のA神話との間に次のような共通点を見いだしている<sup>83)</sup>。その主張を略述してみる（議論を分かりやすくするため表現を多少変えた）。

- [1] ある統率者が敵に対する守りの万全な防壁を造ろうとしている。
- [2] ある超自然的な存在者が正体を隠して訪れ、特定の報酬を条件にその仕事を引き受ける。
- [3] 仕事の報酬についての契約が成立する。
- [4] 石工には援助者がいる。T神話の場合はふたりの神々の協同作業（ただし『イーリアス』21書によるとポセイドンが中心的役割を果たし、アポロンは怠慢な様子をみせている）、または人間アイアコスが手伝ったとされる（ビンダロスの記録による）。ただし、A神話の場合は馬が援助者になっている。
- [5] 期限内に工事を完了。Aの場合は、もし例の妨害が入らなければ、完了していたはずである。
- [6] 仕事依頼人は報酬を支払わない。Tの場合は、ヘラクレスに対しても約束違反を犯している。王が約束した覚えがないとしらを切ったとする異伝もある。
- [7] 建設工の激怒。Tの場合は復讐という手段に訴え、典型的な懲罰として海の怪物（ケートス）が送りこまれている。
- [8] 依頼人は請負人を侮辱または脅迫、あるいはこれを殺害している。Aの場合はソールが登場して請負人である巨人を殺害し、Tの場合もヘラクレスがケートスを殺害している。卑見によれば、後に付言するような意味において、ソールもヘラクレスも「第三者」である。そしてケートスは海神ポセイドンの分身と考えられ、「請負人殺害」の変型的モチーフとみなしうる。
- [9] 王女または女神が報酬の対象となっている。A神話はフレイヤ。それに対してT神話は話がやや錯綜していて、海の怪物（ポセイドンの化身）に王女が捧げられることを阻止したヘラクレスに、その王女が与えられるはずであったが、最終的には戦功のあったテラモーンに与えられている。
- [10] 石工または支配者（王）が超自然的な馬を有している。

両方の神話を比較すると、さらに付言すべきことがある。まず[10]の「馬」についてであるが、T神話の場合は、語り出しの段階において既に、王がゼウスより与えられた名馬を所有している。これに対してA神話の場合には、これとは逆に来訪した鍛冶屋が馬を使役しており、その労働を妨害するという話の結末として、神オージンが新しい馬を入手するところとなっている。さらにまたフォンテンローズの議論には、次のような重大な見落としがあったと思われる。

- (a) 盤石の防御を誇ると思われた堡壘が最終的には撃破されている。T神話の場合はヘラクレスの率いる軍勢によってこの事が成された。これに対してA神話においては、ロキが率いるムスベルの軍勢、その他の魔性の者たちの大攻勢によって神々および世界が没落してゆく、いわゆるラグナレクの語り（『ギェルヴィの幻惑』51章）が壘壁造成神話に連なるものとして重要な意味を担っている。
- (b) 悲劇(a)を招く者は、異郷より船にて襲来している。コルキスから帰路についたヘラク

ラスは、18隻の軍船を率いて襲来したとされる（『ビブリオテケー』2・6・4）。またロキが先導を務めたムスベルの軍勢は、アースガルズの世界を滅ぼすのだが、かれらは「東より船にて」攻め寄せてくる（『巫女の予言』51節）とされる。

(c) いずれにせよ、「海の彼方から来た恐るべき異人」が要砦を攻略している。

また上記の項目[9]に着目すれば、T神話においては、王の契約違反が誘因となって、ヘシオネーを生け贄にするという危難を招いている。ある意味においてヘシオネーは、父王の罪過を一身に背負い、仕事請負人であった海神ポセイドンへの犠牲とされたことにほぼ等しい。しかし最終的に王女は戦士テラモーンの花嫁になっている。おそらく古き時代において、ある大規模な工事に際しては、神に対する乙女の犠牲が求められたのであろう。そしてこの慣習を打ち破る者として「異郷より来たれる戦士」ヘラクレスが登場している。

A神話においては、鍛冶屋（山巨人）は仕事の報酬としてフレイヤとの結婚を要求しているが、やはりこれを阻止したのは「東方遠征より帰還した戦神」ソールであった。ギリシアと北欧の防壁（壘壁）造成神話が同一の図式に基づいていることは、ほぼ間違いない。したがってA神話は、表面的には求婚難題型に属しているように見えるが、その根底には人身犠牲の習俗が潜んでいると推定できよう。

ちなみに紀元前2世紀頃、中期ラ・テヌ文化を開花させたケルト人は石造りの防壁を築いたが、たとえばフランスのアントレモン（Entremont）防壁の石柱には幾つもの人頭が彫り刻まれている<sup>84)</sup>。これはその工事に携わった者たち、あるいは敵の捕虜たちが犠牲に処せられたことを物語っているのかもしれない。もしそうだとすれば、人身犠牲は女性に限ったものではなく、防壁工事の請負人が殺される（T神話は上記[8]で述べたように、その変型）神話モチーフは、ある史実を反映しているとも言える。

ともかくも、ふたつの神話の共通性については十分に認識できたと思われる。しかし、時間と空間の隔たりを乗り越えて、トロイアから北欧、あるいは逆に北欧からトロイアへ伝播したという可能性について、フォンテンローズは懐疑的である。むしろ両方の神話は、場所を特定することは出来ないが、ある共通の源から派生したと主張するフォンテンローズは、たとえば南ロシアやバルカン半島のクルガン文化（紀元前2～3千年紀）における「石造りの壁で囲まれた城塞の町」の成立に関連がある、と推定を下している<sup>85)</sup>。

ただしJ・ハリスは、『トロイア人のサガ』（1200年頃記録）において、トロイアのプリアモス王がネプテューンとアポロンに防壁を造らせておきながら、報酬を与えないという話が記録されており、「（A神話を記録した）スノッリはこの物語あるいは他のトロイア伝説をおそらく知っていた」と述べている<sup>86)</sup>。もしこの推定が成り立つとすれば、いわゆるA神話は口承の伝統に基づくものではなく、作者スノッリの知的素養を基盤としていることになり、これまで重ねてきた議論も振り出しに戻ってしまいかねない。しかしその危険性を救うものは、K伝説とA神話の位置関係である。既に論じたように北欧教会建立の伝説または民話は、A神話の存在を前提にしなくては成立し得ないはずである。言い換えると書かれた側面も無視できないが、「語られていた」アースガルズ壘壁造成神話、あるいは先述したような「原アースガルズ神話」を仮定せざるをえないということになる。思うに、原神話には次のような要素やモチーフおよびキャラクターが含まれていたであろう。

1. 支配者(a)                      2. 正体不明の来訪者(b)                      3. 期限内の防壁完成を約束
4. 法外な報酬を要求    5. 誓約を交わす                      6. 超自然的な援助者
7. 予想外に仕事が完成に近づく                      8. 誓約の一方的な破棄
9. 第三者（誓約に参加しなかった異人・旅する者）の手を借りて(b)を殺害。

北欧教会建立伝説の語りにおいては、上の「第三者の介入」が無く、8と9が連続しており、「名当て」によって(a)と(b)の形勢の逆転を惹き起こしている。そして特にX型の聖オーラヴ伝説に顕著に認められたように、(a)は「海からの異人」、(b)は「山からの異人」という特性があった。ただしその他の多くの教会建立伝説においては、いま述べたような(a)の性格が語られていない。しかし(b)の特徴については多少の差異はあるが、紛れもなく語られている。A神話すなわちアースガルズ神話における(b)は、山巨人すなわち鍛冶屋であった。山に住む鍛冶屋に対する畏怖の念が神話の根底に潜んでいるように思える。しかし神界を訪れたその異人を、労役に服させた後に、報酬の約束を反古にして殺害するというのは、本来、一種の悲劇であるはずであるのに、語りをみる限りにおいては悲劇的な情調が微塵も認められない。それどころか、巨人が「工事の報酬」（スミーザル・コイブ）として受け取ったものはソール神のハンマーによる一撃であったという皮肉めいた語りは、悲劇を通り越してほとんど喜劇に転じつつある。語りの中心軸があくまで神々の側に置かれているため、山からの来訪者は「恐るべき異人」として描かれている。

これに対してT神話の場合には、建設請負人の代表格は「海の神」であるが、やはり仕事の報酬も支払われずに、放逐の憂き目に会っている。ところが被害者であるギリシアの神々は報復手段に打って出たのに対して、北欧の山巨人にはその暇さえも与えられていない。だが両神話の基本的な類似を勘考すれば、A神話の山巨人は古き神の零落した姿とも解しうる。その工事請負人の本性は、K伝説の成立をみるにいたっても部分的に継承されたのではあるまいか。たとえばハスヴィク教会の木彫り像に描かれた、聖オーラヴの足に踏みつけにされたトロールは、頭に王冠を戴き、その容貌は単なる怪物にしてはあまりにも荘厳であるように思われる（Fig. 7参照）<sup>87)</sup>。

いずれにしても北欧の壘壁造成神話と教会建立伝説の両方のレベルにおいて、神または王である支配者が山からの異人に難工事を依頼し、苦役を強いながら、いったん交わした契約を解消し、この者を抑圧・屈服せしめ、または殺害したことが語られている。この事を疑う余地はない。

※ 本稿は1997年度日本アイスランド学会（早稲田大学：1997年6月6日）、および第21回日本口承文藝學會大会（常葉学園短期大学、1997年6月8日）におけるふたつの口頭発表を基礎にしている。前者は「アースガルズ築城神話の成立に関する試論」、後者は「北欧教会建立伝説の成立背景」と題した。今回は特にアースガルズの「壘壁造成」神話についてより詳しく分析し、旧稿に大幅な改訂と増補を加え、新たに異人論の見地を加えた。



Fig. 6 イョーロンフィヨールのトロール像  
(ノルウェー, Møre: 15世紀)。



Fig. 7 王冠を戴いたトロール像  
(ノルウェー, Finnmörk, ハスヴィク教会)。

## 註

- 1) 高橋宣勝 “「大工と鬼六」は日本の民話か。” (日本口承文藝學會第10回研究例会, 1986, 10月). 櫻井美紀 “「大工と鬼六」の出自をめぐる.” (同學會第11回研究例会, 1986, 12月). 遺憾ながら私はこれらの研究例会に出席できなかった. 次の論考を参照した.  
高橋宣勝 「昔話「大工と鬼六」翻案説への道」『文学』56巻 (1988): 27-40頁.  
櫻井美紀 「「大工と鬼六」の出自をめぐる」『口承文藝研究』第11号 (1988): 30-44頁.
- 2) 鈴木満 「がたがたの竹馬小僧—グリム昔話の鑑賞—」『比較文学研究』23号 (1973): 49-78頁.  
および英国の昔話「トム・ティット・トット」も類話となる. スティス・トンブソン 『民間説話』 (上) 荒木博之・石原綏代訳 (社会思想社, 1977): 86-87頁.
- 3) 松村武雄 『神話學論考』 (同文館, 1929), 425-27頁. 当の『ヴォルスンガ・サガ』 (13章) には, スレイプニルから生まれた名馬グラニについて, 簡略に記されているだけである.
- 4) Harris, Joseph, “The Masterbuilder Tale in Snorri's *Edda* and Two Sagas”. *Arkiv för nordisk filologi* 91 (1976): 69.
- 5) von Sydow, C. W., “Studier i Finnsagnen och besläktade byggmästarsägnen”. *Fataburen* (Stockholm, 1908): 19-27. ただしこれに先行する論文, von Sydow, *Fataburen* (1907) は未入手.
- 6) Faulkes, A. ed. *Snorri Sturluson: Edda* (Oxford, 1982): 34-36.
- 7) de Vries, Jan. “The Problem of Loki”. *FF Communications*, 110 (1933): 66.
- 8) de Vries, 67によると, von Sydow (1907): 65-78; 199-218.

- 9) de Vries, 67-70.
- 10) von Sydow (1908), 23-4.
- 11) Puhvel, Martin. "The Legend of the Church-Building Troll in Northern Europe". *Folklore* 72 (1961): 576-7.
- 12) Puhvel, 576. これによると, von Sydow, "Iriskt inflytande på Nordisk guda- och hjältesaga". (1920), '27で主張.
- 13) Fossenius, Mai. Sägner om Trollen Finn och Skalle som Byggmästare. *Meddelanden från Lunds Universitets Folkminnesarkiv*, no. 2 (Lund, 1943): 77 & 87.
- 14) Boberg, Inger M., "Baumeistersagen" *FF Communications*, 151 (1951): 7.
- 15) Harris, 68-9.
- 16) Harris, 74.
- 17) Harris, 75.
- 18) Harris, 74.
- 19) Faulkes, A. (ed.), *Snorri Sturluson: Edda: Prologue and Gylfaginning*. (Clarendon Pr., 1982).
- 20) Turville-Petre, E. O. G., *Myth and Religion of the North*. (rpt. Greenwood Pr., 1975): 57.
- 21) Harris, 68.
- 22) Nilsson, Martin P., *Primitive Time-Reckoning*. (Lund: C. W. K. Gleerup, 1920): 78.
- 23) Jones, P. & Nigel Pennick, *A History of Pagan Europe*. (Routledge, 1995): 123-4.
- 24) Turville-Petre, 73.
- 25) Jones & Penick, 122.
- 26) de Vries, Jan. *Altnordisches Etymologisches Wörterbuch*. (E. J. Brill, 1977): 563.
- 27) Harris, 81.
- 28) Aðalbjarnarson, B. ed., *Heimskringla*. I, Íslensk Fornrit XXVI (Reykjavik, 1941): 316.
- 29) Turville-Petre, 85-94.
- 30) Jónsson, G. ed., *Edda Snorra Sturlusonar*. (Akureyri, 1954): 120.
- 31) Fossenius, 96.
- 32) Puhvel, 571.
- 33) von Sydow (1907), 109. Sahlgren, J., "Sägner om Trollen Finn och Skalle och deras Kyrkobybyggande". *Saga och Sed* (1940-41): 51.
- 34) 水野知昭, "王と犠牲と豊饒: 北欧と日本とギリシアの事例". 『人文科学論集: 文化コミュニケーション学』(信州大学, 1998): 89-107. 特に91-94頁参照.
- 35) パウルソン, ヘルマン 『オージンのいる風景』, 大塚光子・西田郁子・水野知昭・菅原邦城 (共訳), (東海大学出版会, 1995): 108-11頁.
- 36) パウルソン, 108-9.
- 37) Janzén, A., *Personnamn. Nordisk Kultur*, no. 7 (Stockholm, 1947): 52 & 72.
- 38) タキトゥス 『ゲルマニア』. 泉井久之助 (訳注) (岩波書店, 1979): 223頁.
- 39) Sahlgren, 51.
- 40) Wrenn, C. L., *A Study of Old English Literature*. (W. W. Norton, 1967): 219.
- 41) Cleasby, R., Vigfusson, G., eds, *An Icelandic-English Dictionary*. (rpt. Clarendon, 1969): 444.
- 42) パウルソン, 147. 拙訳を若干変えた.
- 43) de Vries (1977), 121.
- 44) Fossenius, 96.
- 45) Fossenius, 95.



- 46) Fossenius, 108.
- 47) Puhvel, 572.
- 48) von Sydow, "Om traditionsspridning". *Scandia* 5 (1932): 335.
- 49) Henriksen, Vera, *St. Olaf of Norway*. (Otta, 1985): 18.
- 50) Fossenius, 97.
- 51) Fossenius, 22-30.
- 52) von Sydow (1932), 335.
- 53) Puhvel, 572.
- 54) Fossenius, 33.
- 55) Puhvel, 572-73.
- 56) Sahlgren, 23.
- 57) Fossenius, 34.
- 58) Fossenius, 34.
- 59) Puhvel, 574-5.
- 60) 写真参照: Henriksen, Vera. *Hellig Olav*. (Oslo: Aschehoug, 1986).  
 Fig.1: p. 106. Fig.2: p. 286.  
 Fig.3: p. 266. Fig.4: p. 10.
- 61) Henriksen (1985), 34-41.
- 62) Fig.5参照: Henriksen (1986), 224に掲載. 船に乗って渡り来る聖オーラヴによるトロール  
 征服の絵画として注目に値する: スウェーデン, ヴェストマンランドのディングトゥーナ教会  
 (1450-1520年頃).
- 63) 日本と共通する北欧の来訪神の信仰や神話伝説については拙稿参照. "客人款待神としてのオ  
 ージン"『ユリイカ』2月号(青土社, 1997): 138-45頁.
- 64) 高橋, 64頁.
- 65) Puhvel, 569-70.
- 66) 写真参照: Sahlgren, 12-13.
- 67) Puhvel, 569.
- 68) 青木和夫その他(校注)『続日本紀一』: 新日本古典文学大系12(岩波書店, 1989): 17頁.
- 69) 出雲路修(校注)『日本霊異記』: 新日本古典文学大系30(岩波書店, 1996): 42頁.
- 70) 馬淵和夫その他(校注)『今昔物語集一』: 日本古典文学全集21(小学館, 1971): 83頁.
- 71) 志村有弘『超人役行者小角』(角川書店, 1996): 81頁.
- 72) 櫻井, 33および40頁.
- 73) 大和岩雄『鬼と天皇』(白水社, 1992): 210頁.
- 74) 大和, 157頁.
- 75) 大和, 220頁.
- 76) Sveinsson, E. Ó. ed., *Brennu-Njáls saga*. Íslenzk Fornrit. XII (Reykjavík, 1954): 265-66.
- 77) Benediktsson, J., ed. *Íslendingabók / Landnámabók*. Íslenzk Fornrit. I (Reykjavík, 1986):  
 53 & 55.
- 78) タキトゥス『ゲルマーニア』, 田中秀央・泉井久之助(訳注)(岩波書店, 1953). 28頁の註に  
 は異説も紹介してある.
- 79) de Vries, J. *Altgermanische Religionsgeschichte*. Bd. 2 (Berlin, 1970): 107.
- 80) Davidson, H. R. Ellis. *Scandinavian Mythology* (London, 1969): 133. 殊に10世紀の北欧にお  
 いてソールの槌を護符とすることが流行した.

- 81) 日本アイスランド学会(1997年6月6日)において、『アースガルズ築城神話の成立に関する試論』と題する口頭発表を行った。その席上、森田貞雄教授やヒースマン姿子氏より質問を受け、再考した結果、「築城」よりも「塁壁造成」が本来の神話的語りであったと考えを修正した。ご教唆に感謝申し上げる。borgには本文で述べた意味のほかに、「半球状に盛り上がった丘」の意味があり、古い城塞の場所や方法を連想させる。紀元前1世紀頃のゲルマーニアにおいて築かれた「丘の上の堡壘」(hill-forts)については次著参照。Piggot, S., *Ancient Europe* (Edinburgh, 1965): 216-18.
- 82) Homeros, *Iliad* 7. 452f., 21. 441f. Apollodorus, *Bibliothèque*, II. v. 9/II. vi. 4; Lucianus, *Sacrifice*. 4; Valerius Flaccus, *Argonautica*. II. 451-578, etc.
- 83) Fontenrose, J., "The Building of the City Walls *Troy and Asgard*". *Journal of American Folklore*, 96 (1983): 55-56. 尚、フォンテンローズが掲げた共通点6と7は内容的に重複するので、ここでは[6]に統括した。
- 84) 写真参照: Piggott, 219.
- 85) Fontenrose, 60-61.
- 86) Harris, 94.
- 87) Fig.6とFig.7を比較参照: Henriksen (1986), 285&310.

付記: Fig.2, Fig.3, Fig.4およびFig.7は妻、水野美知子の模写に拠る。記して謝意を表したい。